

族を基盤とする一種の原始的な組織に転落するからである。その傾向は反社会的であり、支配に対する反感、殊にどんなものであれ直接支配に対する反感を生み出す。このような個人主義が、当初から民主主義を促進してきたのである。こうして合衆国の民主主義は、ジャクソンらの下で西部が優勢になるにつれて勃興した。そのことは良い要素も悪い要素も一切ひっくるめて辺境の勝利を意味した。...

以上ごく簡単にまとめてみたが(6～42頁)、本稿のテーマにあえて引きつけてこの中から重要なポイントを取り出せば、それは以下の3点であろう。アメリカの歴史はその大半が西部の植民地化の歴史であること。インディアンを野蛮と捉え、その住む荒野を戦いで勝ち取っていくことが文明であり、アメリカの発展であること。そのような過程で生み出された個人主義こそがアメリカ民主主義の根幹であること。

## 2. アーノルドのフロンティア論

アーノルドは先の書物で、その独自の観点からターナーの理論を検討している。が、それに先立ち、「移住者の社会は、地域的環境に適応し、順応するように強いられるのであるうか。それともそれは自分たち自身の環境が入った鞆を持っていくのだろうか」という興味深い問いかけをしている(134頁)。そして、フロンティア論はヨーロッパの(またはヨーロッパから派生した)社会の力動的な性格を表す装置として、そしてそうした社会と原始的で不変であると考えられている社会、あるいはそうした社会がみせている生態とを対照する装置として用いられてきた、と指摘する。

彼はターナー理論のなかでインディアンがどのように扱われているかに関して、重要な見解を示している。すなわち、ターナーは一方では、アダムズ学派の人種的で遺伝的な議論に反対していたし、また、アメリカの諸制度のヨーロッパ起源を彼らが強調することに反対する議論をしていた。しかし他方では、インディアンたちを征服され、白人のその後のアメリカ史から排除されるべき必要がある、劣った種族であるとする観念を是認していた。このフロンティアは、人種的服従とその後の排除をもたらしたフロンティアであった。そこには強力で意識的なダーウィンの方向性があった。フロンティアは、たんに新しいアメリカを生んだ文化的母胎であるだけではなく、原始的なインディアンから白人の工場や農場や裁判所へと変わっていった、ターナーがいうところの「社会進化の記録」でもあった。

さらにアーノルドは言う。ターナーの見方では、インディアンたちは環境の一部であり、自然と同種のものであり、原始的で邪魔になるものであったが、森林や川や山の道と同様に、形成していく力をもつものであった。インディアンたちは克服されなければならなかった。そうすることで、彼らに変わる白人のアメリカ的制度や価値を栄えさせることができたのである、と。

彼が引用するターナーの文章を記しておこう。後者の基本的考え方がよくでている。

カンバーランド溪谷に立ち、文明の進歩を見よ。塩泉への道をたどるバッファロー、インディアン、毛皮商人やハンター、ウシの飼育人、開拓農民が、一つの縦列をなして行進して行き、そしてフロンティアは過ぎ去っていく。一世紀後にロッキー山脈のサウス・パスに立ち、前より広い間隔をとりながらではあるが同じ行進が続いているのを見てもよ。

ターナーのインディアンの扱いに対するアーノルドの批判は手厳しい。ターナーがあまりにも白人的な立場、ダーウィンの進歩主義的立場に立ちすぎているからだ。現時点でわたし自身がターナーを批判するとすればまさにこの人種的偏見にこそあるだろう。が、こうした見方はその後ウォルター・W・ウエップにも引き継がれていく(『グレート フロン